

未来人材を活かす社会

日経ビジネス4月9日号の3つの記事を読んで、前回に続き能力を活かせない日本のサラリーマン社会について考えさせられました。まず、平成の30年間に日本企業がいかに凋落したかを示す世界企業の株式総額トップ15の比較表が掲載された記事です。平成元年に11社あった日本企業が平成31年にはゼロになったことを示し、その理由を「起業の少なさやITの弱さ」に加えて伝統企業が変われなかったことも大きな原因と述べています。実際、外国の伝統企業5社(ロイヤル・ダッチ・シェル、ジョンソン・エンド・ジョンソン、エクソン・モービル、ウォルマート、ネスレ)はランクインしています。記事では日本は入り口で多様性を否定する「おっさん力学」と「エビデンスの過剰信仰」がはびこり過剰な計画、過剰な分析、過剰な法令順守を求める企業風土となり発想の転換が必要な社員の改革余力を奪っているとの指摘です。

次の記事は、缶詰のへこみも許さず、曲がったキュウリは買わないという「顧客」と顧客本位で「不良品を無くせ、ラインナップを増やせ」などの要求を乱発する「上司」という二神の存在が日本の生産性向上を妨げているというのです。中身は同じ、不良品は交換すればOKという海外の常識を少しでも適用できれば無駄な残業は減り生産性は向上するという論調です。

最後は、新しい治療法など医療を作る人は医師の1~2割で残りの患者に寄り添う医者のかかりは今後AIにとってかわられ人材ロスが生じるだろうという記事です。日本では優秀な学生の多くが医学部に進学しますが、入学した人は進路変更が困難な実態を示し、その人材が例えば防災分野で活躍すれば10万人単位で人命を救える可能性があるかと主張しています。

いずれも多様な人材の登用と人材が能力を発揮できる機動的・流動的な社会を実現できれば解決する課題で、地球の限界を見える化し過去のしがらみを強制的に排除しつつあるコロナ禍は案外、日本企業が変身できる絶好のチャンスに見えてきました。そのためには自ら考え行動できる人材の育成が不可欠です。

街道を歩く

小倉キャンパスの近くに長崎街道の起点として有名な常盤橋があります。長崎街道は57里(約228km)ほどの街道で途中25か所の宿場がありました。江戸時代の人々は健脚で平地なら1日に10里(約40km)を歩いたそうで1週間の道のりでした。ルートは黒崎までが国道3号、黒崎から国道200号沿いに南下、鳥栖から長崎まではほぼ国道34号に並行しています。

健康に良いと始めたウォーキングのバリエーションとして長崎街道歩きを思いつきました。まず常盤橋から黒崎宿までの約13km、次週に黒崎から木屋瀬宿までの約20kmを歩いてみて、1日の歩行距離が当時の半分の20km程度なら歩き通せる実感を得ました。そこで気候が良い季節の休日、日帰りを前提に前回歩き終えた地点からまた歩き始める方法で長崎を目指すことにしました。ところが、次の飯塚宿までの約24kmになると土地勘がなく迷子になったり歩道や日陰のない道を延々歩いたり、トイレ休憩やどこで昼食をとるか下調べしておくことの大切さを思い知らされました。以後、街道が途切れている箇所や目印となる建物、行き帰りの電車の時間などをインターネットで事前に調べて地図に書き込み持ち歩くようになりました。思い出深いのは冷水峠や日見峠などの峠越えです。峠道には並木や石畳などの面影が色濃く残っていて歩きながら当時を想像します。精根尽き果てて峠に着いたときの達成感もなんとも言えません。平地でも旧家や道祖神を見つけたり、珍しい野鳥に出会ったりしますし、道に迷ったことさえ思い出に残ります。佐賀の武雄宿から先は鉄道の便が悪く日帰りが困難になり、近くの中津街道や唐津街道、萩往還などに行程変更していましたが、街で見かけた高速バス「出島号」を使えば日帰りが可能なことを発見して、昨秋ようやく長崎まで完歩しました。要した日数は13日、足掛け3年かかりました。

おばせキャンパス近くにも中津街道があります。休日は、コロナ禍でも可能な「街道歩き」でスマホ脳を解放してみませんか。